巻頭言

赤堀正明

最近の建て売り住宅には植栽がない。樹の手入れが面倒だという入居者が多いので、初めから木を植えないのだそうだ。

詩人・武者小路実篤（むしゃのこうじさねあつ）の詩文に、

天に星、地に花、人に愛

という名言がある。

この言葉は文芸評論家の高山樗牛（たかやまちょぎゅう）の言葉と伝えられている。高山樗牛は『太陽』（明治二十九年八月号）に掲載した「『今戸心中』と情死」の中で、

天にありては星、地にありては花、人にありては愛、これ世に美しきものの最たらずや。

という文節を書いている。ゲーテが初出だと云う人もいるようだが、出典は明らかではない。

その言葉は至極あたりまえの事を云っているのだが、その〝あたりまえ〟が心に響くのである。

このことに気付かされるのは言葉である。
イタリアの小説家・記号学者のウンベルト・エーコの『薔薇の名前』が一瞬頭をよぎる。

薔薇は棘があって、美しい花びらを持っているから薔薇なのか、薔薇は薔薇という名前が付いて薔薇なのか

言語学で「死」とは、みんなが死をどのようなものか経験して知っているから、死から悲しみや苦しみが連想されるのであって、死は死の言葉に因って死を理解するのである。
歌人の斎藤茂吉（さいとうもきち）は自らの歌の本質は諸法実相にあるとしている。疎開先の山形で詠んだ最上川の歌（『白き山』）に逆白波の語がある。

最上川
逆白波のたつまでに
ふぶくゆふべと
なりにけるかも

この歌は最上川逆白波以外の漢字を用いないで、逆白波の語を際立たせている。更に、逆白波は、川の流れとは逆向きの強風で白く波立つ様子を見極めた造語で、見事としか云いようがない。名も無きものに名が現れた一瞬を見る想いがある。

爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心はすなはち大地、大地則草木なり。爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり。

（『事理供養御所書』定遺一二六二頁）

爾前の経々とは、殊に別経の華厳経を指すと思われるが、その原理は一念三千であり、法華経は一念即三千を原理としている。

『法華玄義』五重玄義の中の釈名で、妙法蓮華経は譬喩ではなく、名そのものを真理とすることに総ては教えられている。

水心なけれども、物を清める徳あり

とは小の存在そのものに働きが具わっているのであり、同じように、妙法蓮華経の五字は人を仏道に導く文字であり、言葉なのである。

日本の幸福度は下がり、自死する人は増え、子供がいなくなる。

庭に草木を植え、孫と手入れをする老人の姿は幸福を招くに違いないと思える。